

社長メッセージ



日本赤十字社
社長 近衛 忠輝

第52回日赤医学会総会に寄せて

日本赤十字社医学会の第一回の総会が開かれたのは、東京オリンピック開催の年である1964年の11月で、私はその一ヶ月後に日赤に入社しました。

当時、赤十字の病院経営は大変厳しく、激しい組合運動の結果、その数年前には二つの病院が閉院に追い込まれております。私が配属された外事部にも国際活動の予算は殆ど無く、海外に職員を派遣することも大変な時代でした。ある時、全国の赤十字病院の中から、一人でも二人でも医師か看護師を出してくれませんか、当時の衛生部長にお願いに行きました所、君は病院経営の苦しさを分かっておらん、と一喝されて終わりだったことが思い出されます。赤十字病院としての役割は何か、特色をどう出すかは、どの会議の議題にも上り常に問われていましたが、まずは病院経営の安定ありきで、赤十字医療の在り方や、他の赤十字事業との接点を探るといった動きはなかなか出てきませんでした。

こうした時代の中で生まれた日赤医学会ですが、設立以来30年以上に亘り、会員は医師、薬剤師に限定されてきました。ようやく1998年になって看護師の参加への道が開かれ、2006年には国内外の災害救護に携わるあらゆる職種の人々の参加が実現しました。こうした背景には、時代の流れと共に個々の病院が赤十字病院としての特色をより明確に打ち出す必要が出てきたこと、赤十字病院が持つネットワークとスケールを生かすことのメリットが分かってきたこと、そして、大規模な災害救護のように、他の業種や海外姉妹社との密接な連携があってはじめて、赤十字の真価を発揮できることが明らかになってきたからだと考えます。

本医学会が、日赤が持つ医療資源を国際化の進む医療の中で、どう生かして行ったら良いかを取り上げるのは、誠に時宜に適っており、その結果が具体的な行動につながって行くことを期待しております。